

平成27年7月1日(水)

老球の細道143号

汝とは〈汝の食べた物〉である

会津バスケットボール協会 室井 富仁

事の発端は2002年1月に発覚した雪印食品の牛肉偽装事件であった。雪印は、BSE(牛海綿状脳症)いわゆる狂牛病への国の対策(国産牛肉を買い取る)を悪用して、売れ行きが落ちていたオーストラリア産輸入牛肉を国内産と偽って買い取らせたのである。

BSEとは、体内タンパク質プリオンが感染源になり、脳がスポンジ状になって、起立不能に陥り、2週間から半年で死に至る牛の感染症のことである。BSEに感染した牛肉が日本国内で発見され、当時日本の食卓から牛肉が消えた。吉野家等の牛丼がしばらく販売停止となって、相当つらい思いをした吉野家通もいたのではないだろうか。

この事件を契機に、食に対して消費者が不信感を抱く事件が、日本では続出した。特に、2008年6月起きた「ミートホープ事件」は、私たち消費者が考えさせられる話題を提供してくれた。食品加工会社「ミートホープ」は、豚肉を牛肉と偽りコロッケ用にスーパーへ卸していたのである。色の悪い肉に血を混ぜたり、風味からバレないように牛脂を加えるなど様々な細工をしていた。賞味期限も改ざんしていた。食品の安全や安心を考えると絶対許せない事件である。

当時の社長のコメントに非常に興味深い内容があった。

「販売店も悪いし、半額セールで(冷凍食品)を喜んで買う消費者にも問題がある」

「消費者も悪い」というコメントで、消費者の怒りに油を注いだ。しかし、この事件の背景にある、価格だけが食品を選ぶ唯一の基準になっていることを考えると、社長の言うこともあながち間違いではないかもしれない。安心と安全にはそれなりの価格コストがかかる。安さを求めることは、安全、安心を放棄することにつながるのかもしれない。

食物の分子はそのまま私たちの身体の分子になる。つまり、食べた物で身体はできあがる。良い物を食べれば良い身体ができあがり、悪い物を食べれば悪い身体になってしまう。あたりまえの話である。

バスケットボールアスリートは身体が資本である。その身体を作るのが食べ物であれば、もっと食べ物にこだわりをもたなければならぬのは至極当然のこと。インスタント食品を多く取ればインスタントな身体になり、栄養のアンバランスの食品ばかり食べていけばアンバランスな身体ができてしまう。「食べる」こともトレーニングである。

お金をかけないで安ものばかりを食べていけば、安さを維持するために食品に含まれるその他もろもろの物で身体の安全は脅かされるかもしれない。「食」は最後まで譲ってはいけない分野である。昔から偉い人たちは常に言っていた。「頭と腹にはお金をかけろ」。携帯電話には毎月何万円もお金を払いながら、食べ物の5円、10円の価格差に過剰反応する思考は狂っていないだろうか。

食事が身体を作り、活動のためのエネルギーを作る。食べることは個人の嗜好を満足させ、毎日の生活を豊かにし、明日への活力を育てる。食べることは楽しい。そして、食は文化でもある。その食を安っぽいものにして、ただ食べればいいという感覚で扱おうと、いずれそのしっぺ返しは自分の身体に及んでくることを肝に銘じたい。

美味しい物を肴に、美味しいビールが飲めるからバスケットボールもがんばれる。